

平成28年度埋蔵文化財発掘調査の紹介【袴野城山城跡】

遺跡名：袴野城山城跡（はかまのじょうやまじろあと）
内容・時代：中世山城跡
所在地：武雄市東川登町大字袴野
調査期間：2016年9月～12月
調査面積：4,360㎡
事業原因：九州新幹線西九州ルート建設
事業主体：（独）鉄道建設・運輸施設整備支援機構
調査主体：佐賀県教育庁文化財課

〔遺跡の概要〕

袴野城山城（以下、袴野城）は、六角川が南北に流れる平野部を望む丘陵尾根上を中心に築かれており、今回、発掘調査を行った調査区は標高65～80mの範囲にあたります。袴野城についてはこれまで発掘調査は行われたことはありませんでしたが、地表面での観察で曲輪(*1)や堀切(*2)の存在が明らかであるほか、古い地名の調査においても「シロヤマ・シロノタニ・ジョウヤマ」など、城に関わる地名があったことが知られています。一方、文献史料では城の名前や城主に関する手掛りは現在のところ知られておらず、実態についてほとんど知られていませんでした。

今回発掘調査を実施した範囲は、工事によって影響が及ぶ部分に限られるため、城跡の中心部分ではありませんが、往時の袴野城の様子をうかがい知ることができる調査成果が得られました。

*1 曲輪（くるわ）：山の尾根上や斜面を切り盛りして造った平場。

*2 堀切（ほりきり）：尾根を、その方向に対して直角に切る堀。



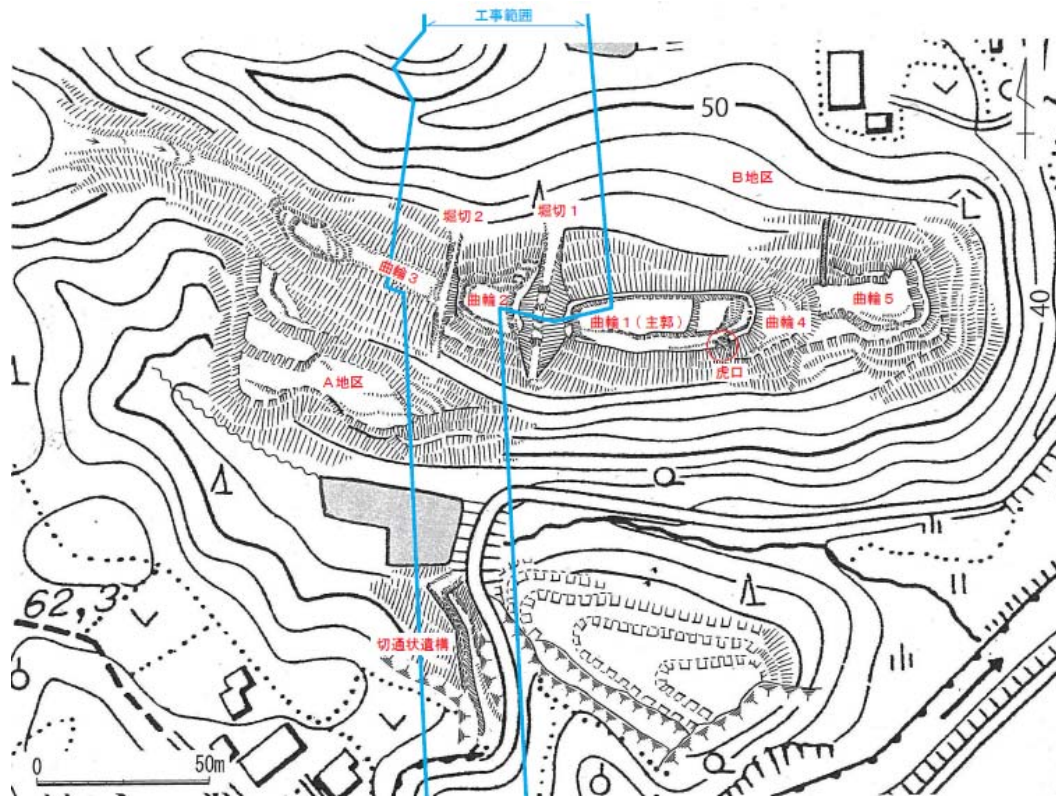


図2 袴野城山城跡縄張図

(佐賀県教育委員会 2014 『佐賀県の中近世城館 第3集』に一部加筆)

袴野城は、山を切り盛りして曲輪・堀切・土塁を造り出す「土の城」で、典型的な戦国時代の山城です。この場所はずもと尾根筋が狭く、かつ急斜面であることから、主に尾根上を人工的に掘削するだけで構築されています。

頂上部には、東西 55m、南北 17m の主郭(曲輪 1)となる平坦地があり、この主郭の周囲には切岸(きりぎし)とよばれる急な斜面が造り出されています。また、平坦地から切岸へと続く肩の部分には、高さ 1.5m の土塁が築かれています。この土塁は、主郭の南東部で途切れている箇所があり、虎口(こぐち:出入口)である可能性が指摘されています。この主郭の東側の尾根上には、2 段の腰曲輪(こしぐるわ)となる平坦地(曲輪 4・5)が配置されています



写真1 主郭(曲輪1)土塁残存状況



写真2 堀切1調査前状況(北から)

が、主郭と比べて平坦面の造成具合が整っておらず、また切岸も主郭ほど急な斜面とはなっていない。一方、主郭の西側は大きく深い堀切1で遮断されており、その深さは最大5m、堀上幅は11mです。堀切1の西側には曲輪2の平坦地がみられ、さらにその西側には浅く規模の小さな堀切2で区画されています。これら尾根上の平坦面以外には、南北の斜面において山城の遺構はみられませんが、南西側の山裾、標高51～54mにおいて平坦地(A地区)があり、城の最終段階での館跡の可能性も指摘されています。

このように袴野城は尾根上を利用しただけの比較的シンプルな山城ですが、土塁を巡らせた主郭や深い堀切1など、防御性の高い構造を持っています。

〔発掘調査の成果〕

発掘調査は、新幹線工事の影響が及ぶ主郭の西端、曲輪2・3の全域、堀切1の半分、堀切2の全体について実施しました。

主郭の調査範囲はごく一部でしたが、土塁の残存状況を調査し、高さ1m以上が盛土で構築されていることがわかりました。また、土塁上の表土の中からは、城の存続時期の遺物と思われる「風炉(*3)」の破片が検出されています。

曲輪2では、表土の下より大小多数の穴が見つかり、その多くが柱穴と考えられます。このうち、曲輪2の北面肩部に沿って7基程度の小穴が直線的に、また等間隔に並ぶ様子が2列でみられ、防御のための柵列(さくれつ)の可能性があり、曲輪3でも同様に、



写真3 曲輪3北側斜面 柵列がならぶ様子 (西から)

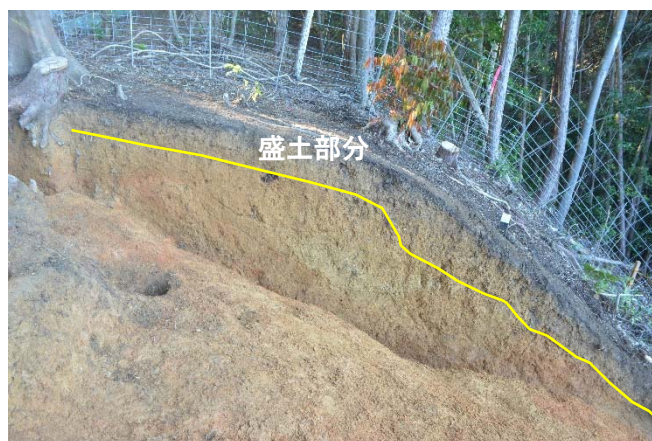


写真4 曲輪3西側 盛土造成状況 (東から)

北側に面して東西に小穴8～9基が直線的に並び、同じく柵列の可能性が考えられます。ただし、曲輪3の肩部ではなく、やや斜面側に下った位置に配置されている点が曲輪2と異なります。なお、曲輪3の西側は一部盛土で整形されていることが明らかとなり、これは、尾根上の平坦面をより多く確保するためのものと考えられます。なお、柵列の柱穴はこの盛土上から掘られています。

堀切1の調査では堀底の掘り下げを行いました。深さ30cmほどで砂岩の岩盤が現れ、城の放棄から400年以上経っているにもかかわらず堆積が進んでいない様子がわかりました。また堀の西側(曲輪2の上部)では、堀の肩に沿って土塁が設けられており、横矢(*4)をかけるための工夫であったものと考えられます。堀切2についても表土の堆積は薄く、それ

だけでは防御性に疑問を感じるものですが、堀の東側(曲輪2の肩部)にも柱穴が並ぶ様子がみられ、堀切と柵列が一体となって機能していたものと推測されます。

なお、調査区内での出土遺物は少なく、「風炉」の他は陶器の大甕や染付碗・皿などで、18～19世紀のものが目立ち、中世山城でよくみられる「かわらけ(土器の杯)」や輸入陶磁器などは見つかっていません。江戸時代の遺物の存在や堀切の底に堆積土が少なかったことと合わせ、江戸時代において山仕事などに伴いある程度管理されていたのかもしれませんが。

*3 風炉(ふる) : 茶道具の一つで、火を入れて釜をかけるもの。

*4 横矢(よこや) : 侵攻する敵に対して側面から矢や鉄砲で攻撃すること。

[まとめ]

今回の発掘調査は袴野城の中心部分ではありませんが、曲輪2・3においても柵列を含む柱穴が多数みつき、この部分も城の一部として機能していたことがわかりました。しかし、主郭や堀切1の立派さに対して、曲輪2・3や堀切2は造りが曖昧であり、さらに西側の城域が明確ではないなど、同じ城内でも整備の在り方が異なります。よって、城の改修がなされたことが想像され、特に主郭や堀切1は、袴野城の最終段階に整備された遺構であるものと考えられます。

戦国時代の武雄地方周辺は、武雄後藤氏と有馬氏(肥前高来郡)、後には後藤氏が服属した龍造寺氏と有馬氏との攻防の地となりましたが、袴野城の改修もそのような軍事的な緊張の中で行われたのかもしれませんが。しかし天正十五年(1587)の豊臣秀吉による九州平定に伴いその役割を終え、袴野城は廃城となったものと思われま



写真5 発掘作業完了状況：主郭・堀切1・曲輪2